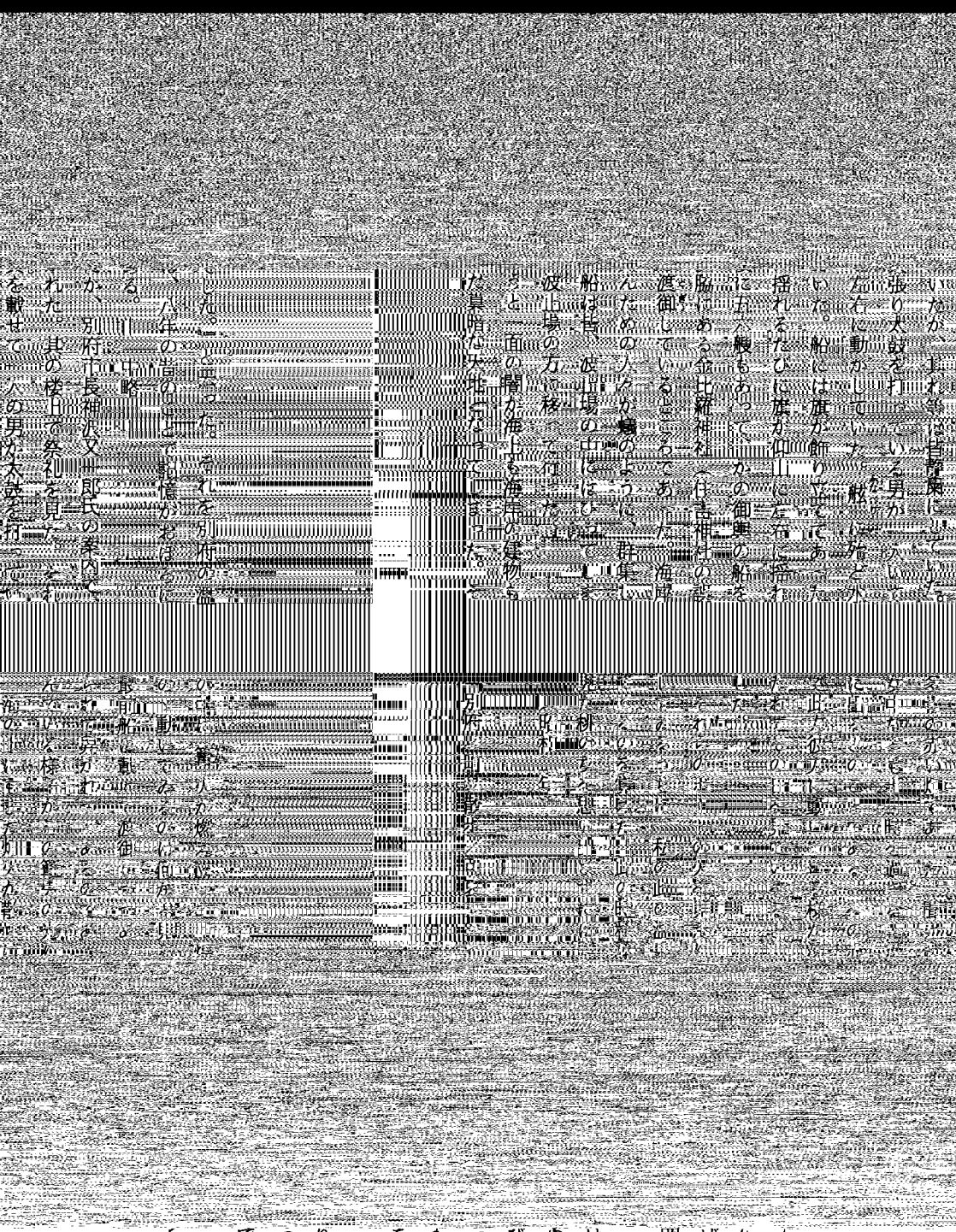
ハイカラな女ではなく、この別府の趣のある一人の女であった。私はそを思ふと、この女を思はずにはをら別府に来て案内記を読んで見ると、壮なる建築だと書いてある。その桃で囲った古い温泉であったやうに思の板で囲った温泉は取り毀されていた日名子氏が、今夜又町の温泉にことであった。もう九時まで待った。私は寝床に入らうと思った。の女はもう居ないにきまっているかである。先刻どこかで花火が揚がった。こあらう。そのうち日名子氏が見えた。も前の別府町時代の町長であった日の行列について歩かねばならなかった、なったと云った。八年以前も案内に氏にこの桃の女の話をすると、『あ



子　でっり　をもっびやは　囲げ。も

百杵の繁昌なり、
昌之が助けに由る
旅舎一百四十有
う可からざるには
旅舎を専業とする
晤らしき旅館を数
其の他は概ね木
も、未だ特別の
即ち別町のみ、唯
ど自から奮はゞ、
望を有せり。天の
を受くといふ。県
再思せよ。我や既
望む。既に之が
し。我、其の県
く、徐々に実行の
明治三十年六月）

（入江篇）

・別府温泉誌